

教学 IR レポート

第4号

## 学修行動・学修実感分析（2019～2022年度）

文科省が各大学に一齐に2019年度より学生調査を行って、5年経とうとしています。これは、各大学の教育改善に活かすこと、各大学に対する社会の理解を深める一助とすることを目的としています。

本学でも同様に、2016年度よりIR情報委員会を中心に、教育改善と地域への説明を目的として学生動向調査（学修行動と学生生活の実態把握のためのアンケート調査）を実施してまいりました。今回は新課程になる前の2019～2022年度の4年間の学生動向調査データの中から、学修行動や学修実感に関わる項目のデータを用いて、集計・分析・可視化を行っています。

今回のデータ集計・分析の目的は、新課程になる前の4年間の本学の教育体制や教育課程を振り返り、次期体制・課程における改善点を見出すことにあります。新課程になる前の4年間はコロナ禍もあって、学生の学修行動や学修実感が大きく変動したことが推察されますが、そうした変動とともに本学の教育体制・課程の軌跡を振り返ります。

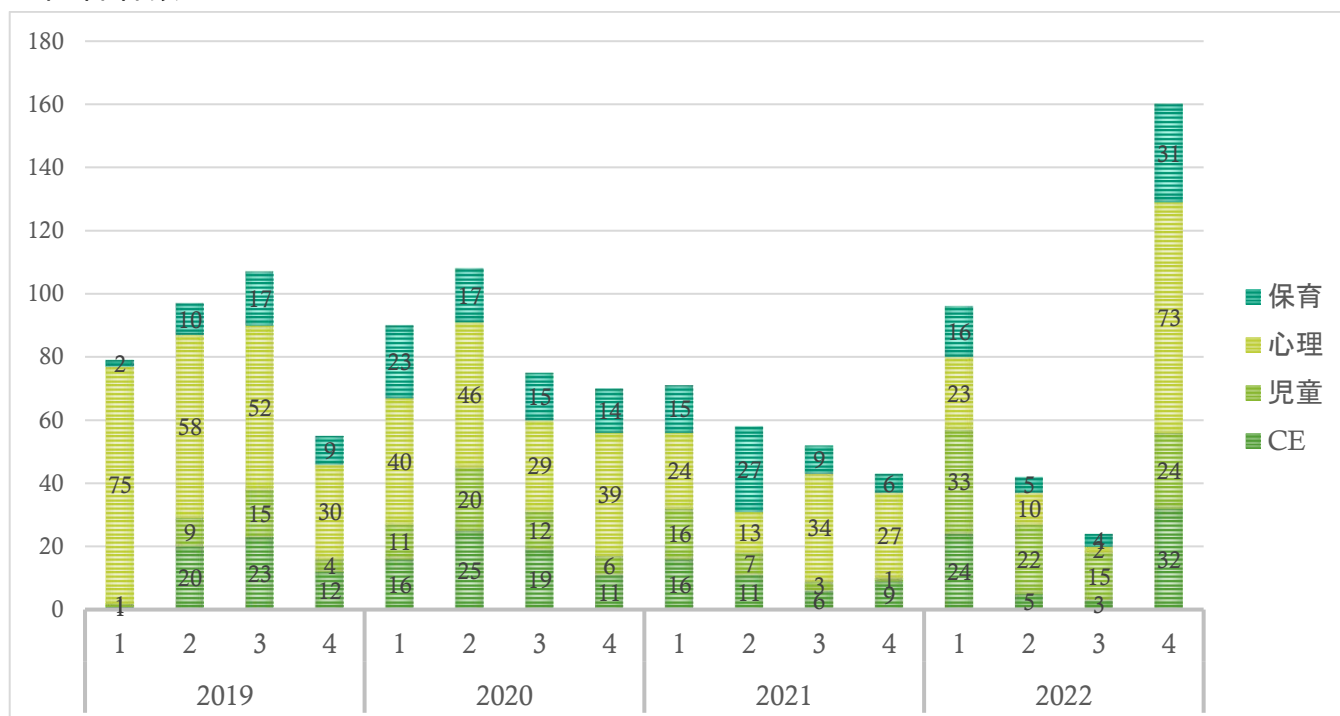
### 《対象データ》

2019年度から2022年度の学生動向調査（2021年度より学修行動調査と学生生活調査に分けて実施）のデータの中から、

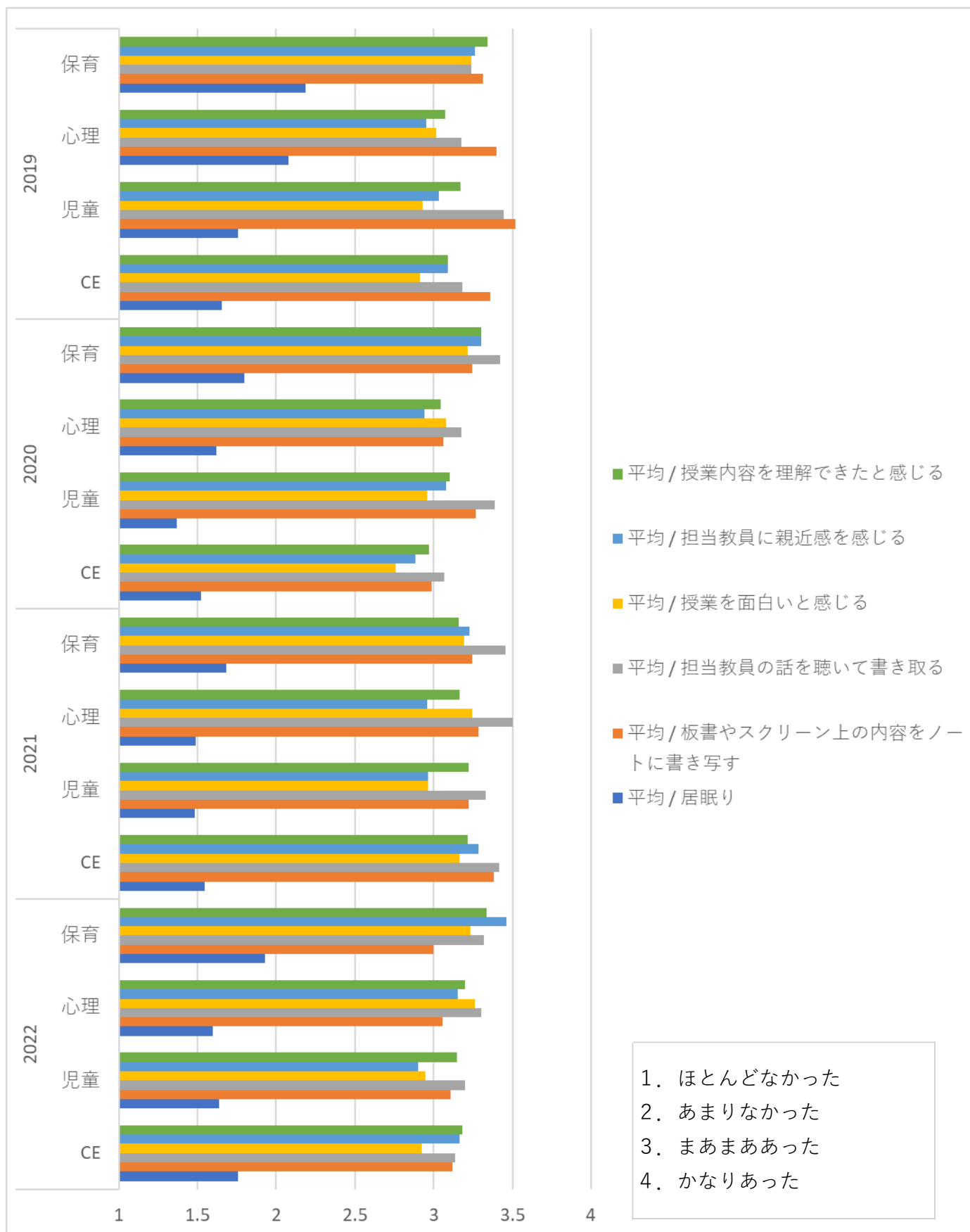
### 《分析方法》

学科専攻、年度、学年ごとの平均値を算出し、グラフ化しました。

### <回答者数>

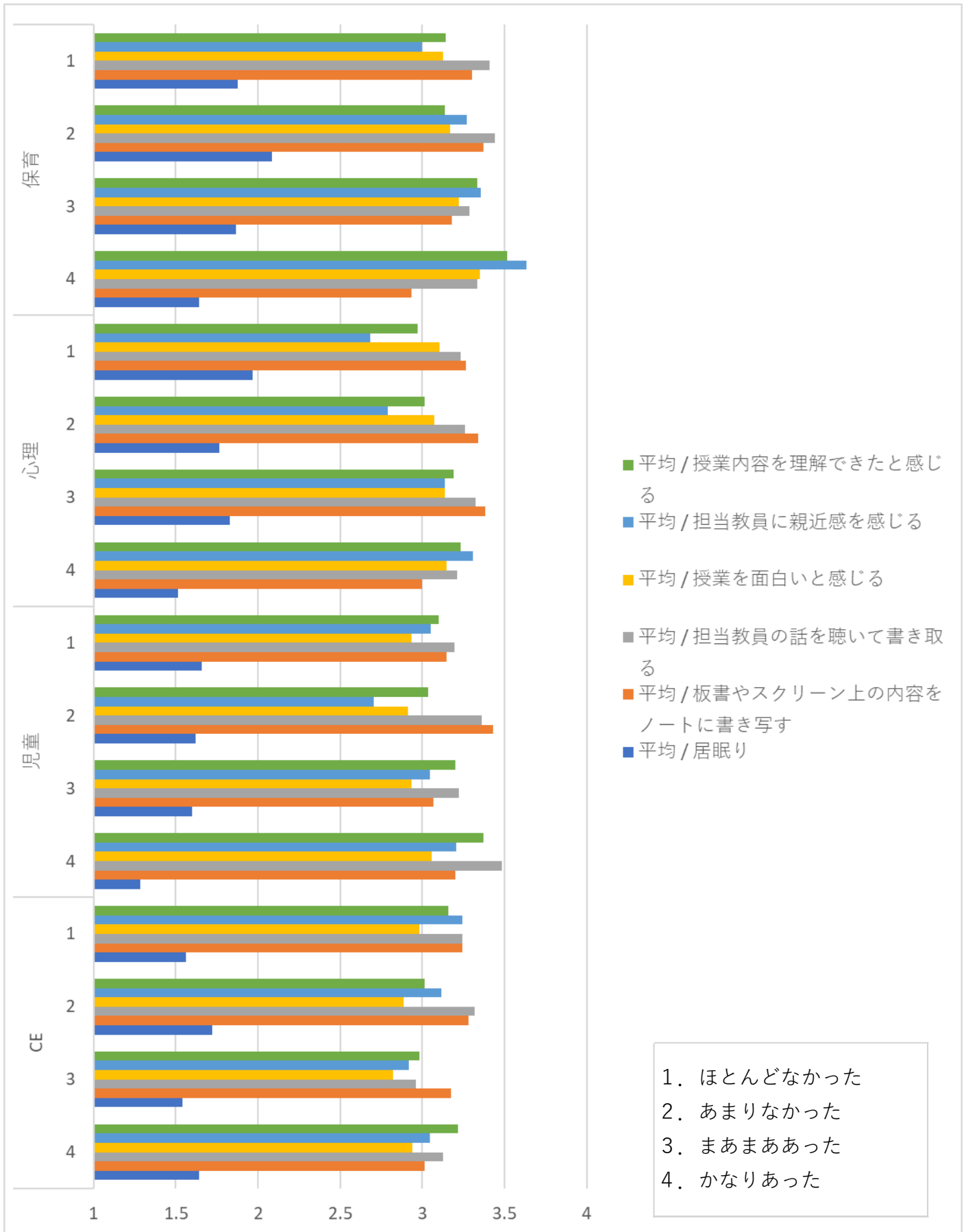


# 学修態度



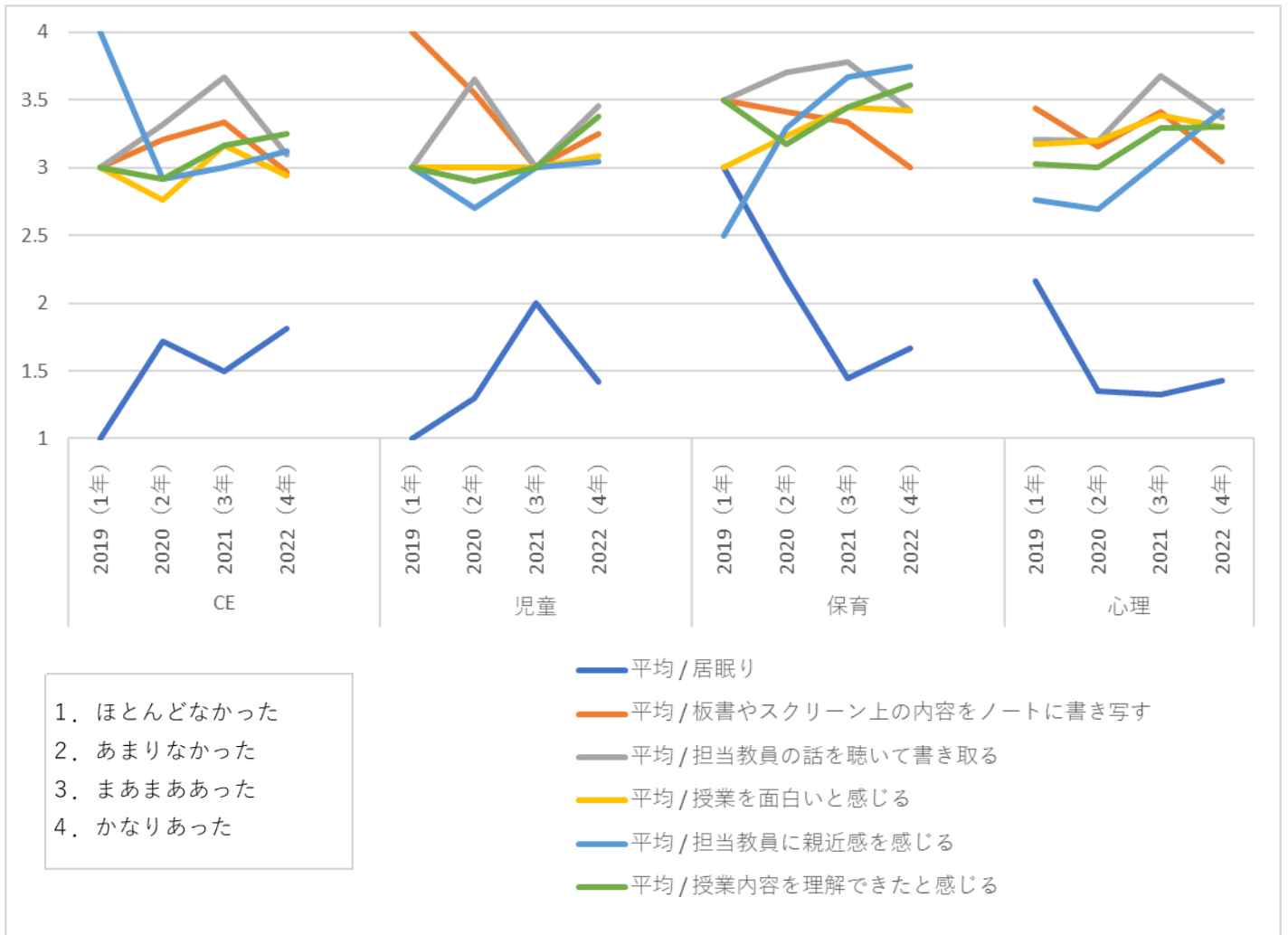
(年度・学科専攻別の学修態度)

- ・厳しいコロナ禍の 2020・2021 年度でも「授業内容の理解」は一定程度ある
- ・学科専攻によって「教員への親近感」「授業の面白さ」に違いがある



(年度に関係ない学科専攻・学年別の学修態度)

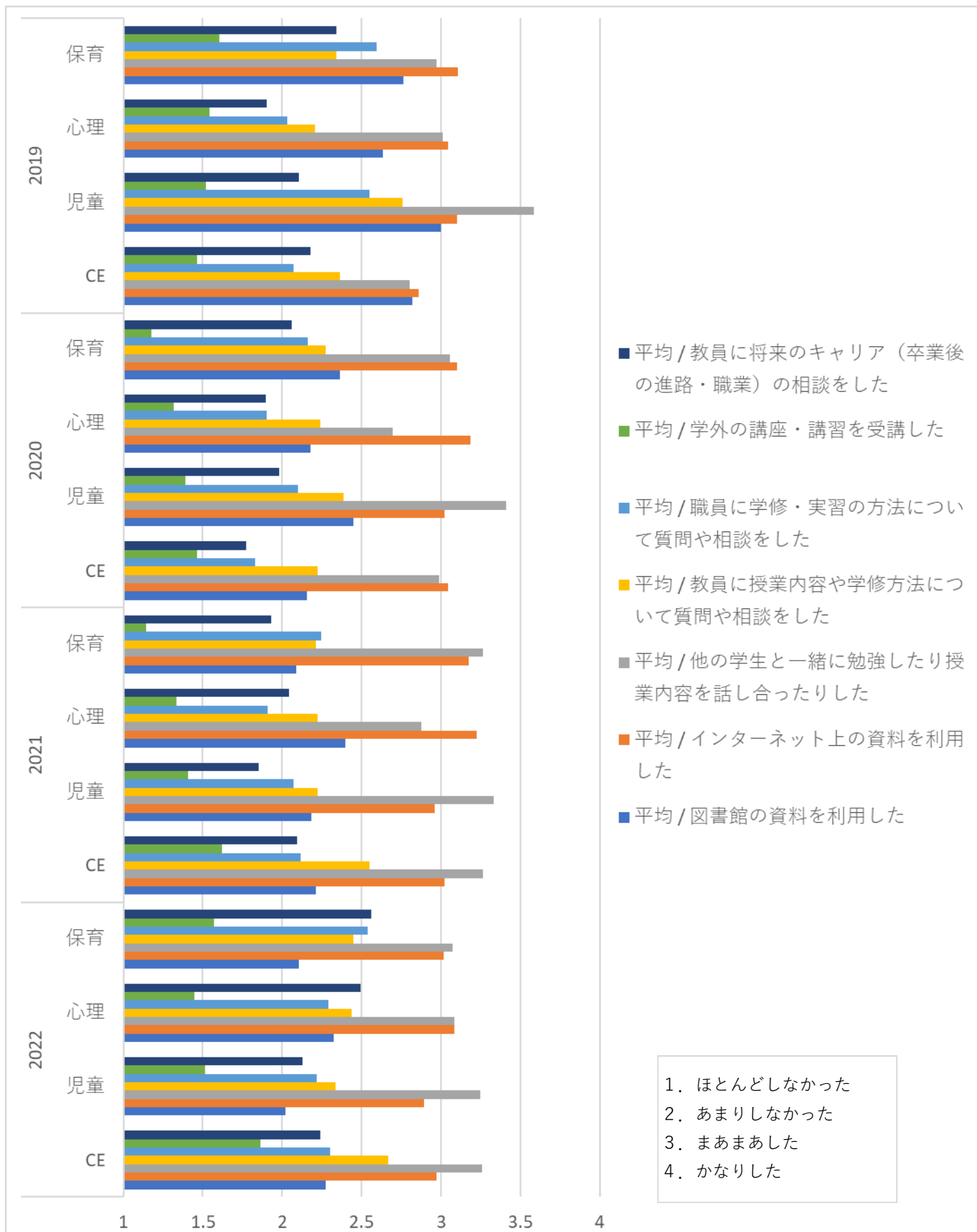
- ・保育は「授業内容の理解」「教員への親近感」「授業の面白さ」が学年進行とともに上昇する
- ・心理は1・2学年での「教員への親近感」が低い
- ・児童とCEでは「授業の面白さ」が「まあまああった」を下回る



(2019年度入学者の各年度追跡データ:学修行動・態度)

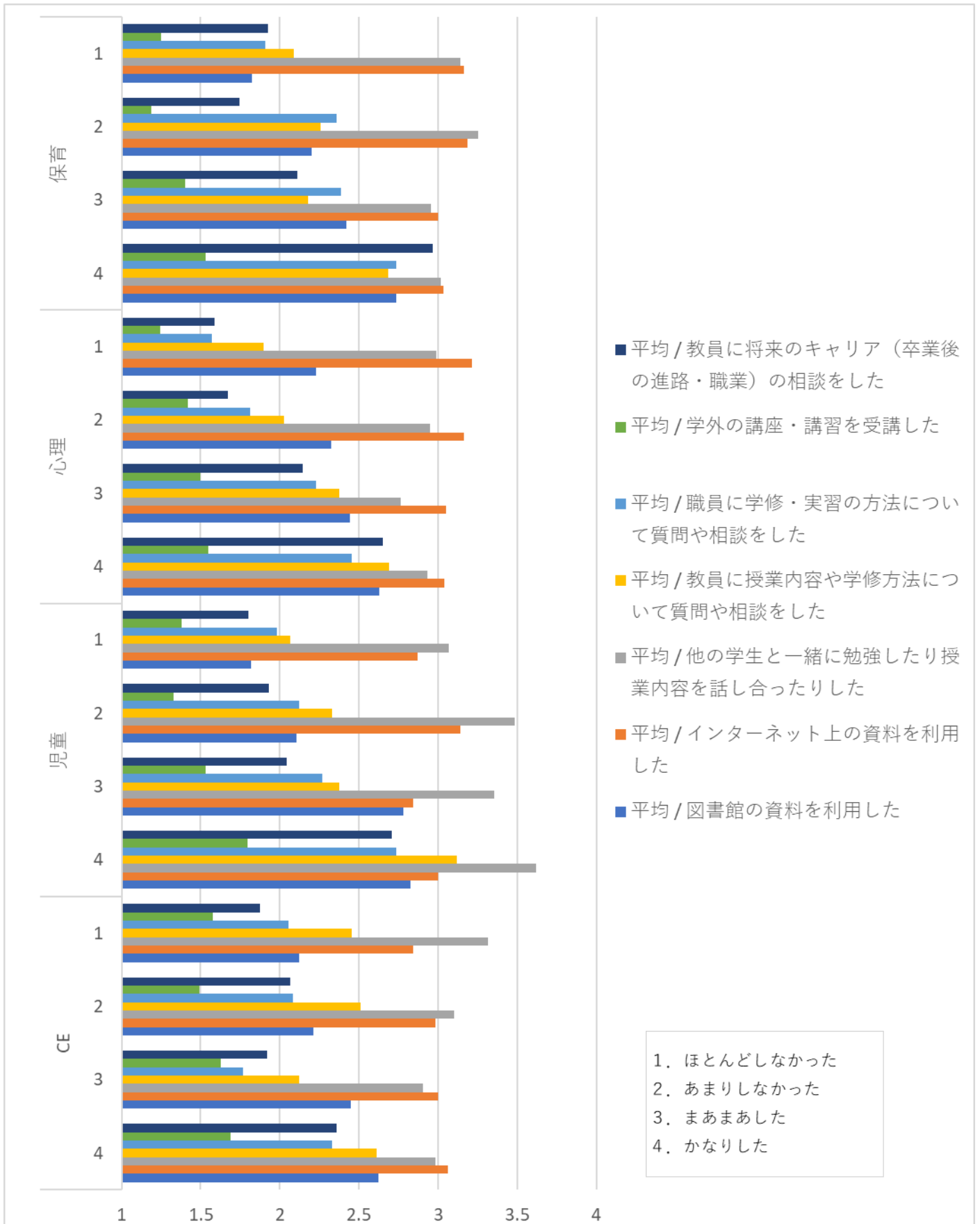
- ・保育では「授業の面白さ」が学年進行とともに上昇する
- ・保育と心理では「教員への親近感」が学年進行とともに上昇する

# 学修行動



(年度・学科専攻ごとの学修行動)

- ・2020年度より「図書館資料の利用」が減少している
- ・2022年度は保育と心理で「教員へのキャリア相談」が高い

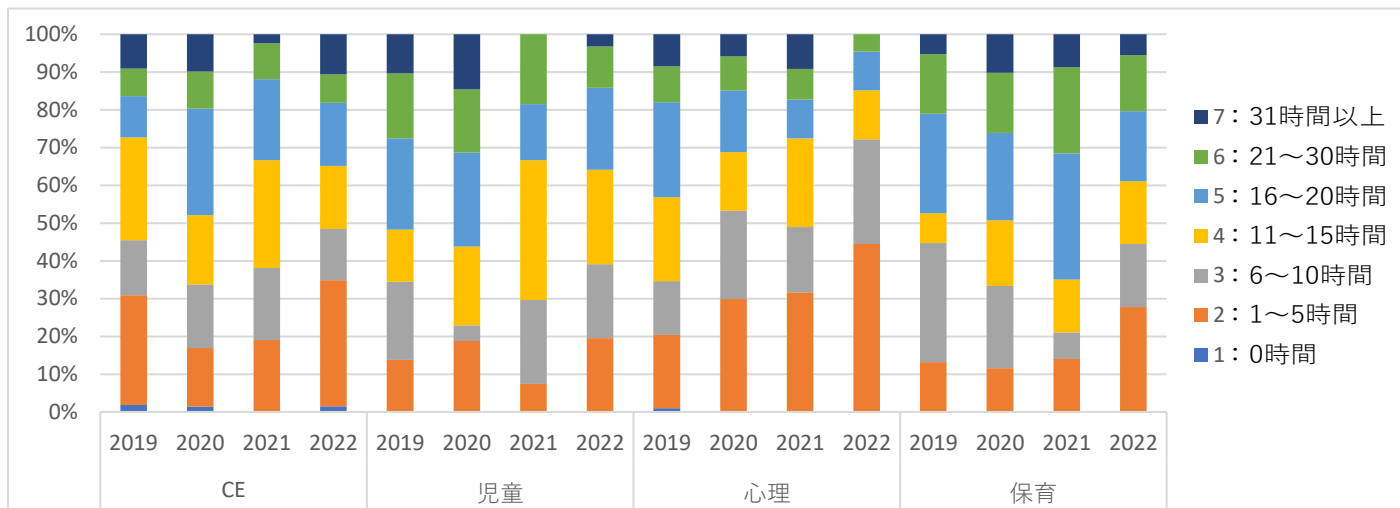


(年度に関係ない学科専攻・学年別の学修行動)

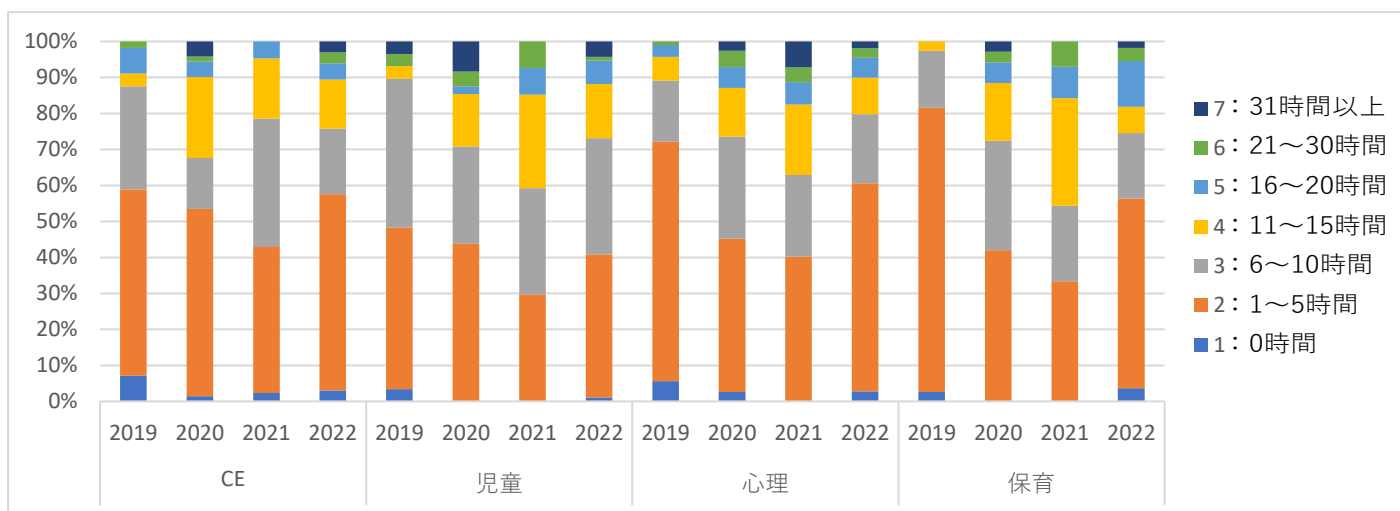
- ・児童は2～4年生で「学生同士の話し合い」が多いが、保育は1・2年生でそれが多い
- ・保育・心理・児童は学年とともに「教員への学修相談」が増えるが、児童は特に4年生で「教員への学修相談」が多い

## 学修時間・学修外時間（授業期間中の1週間の時間）

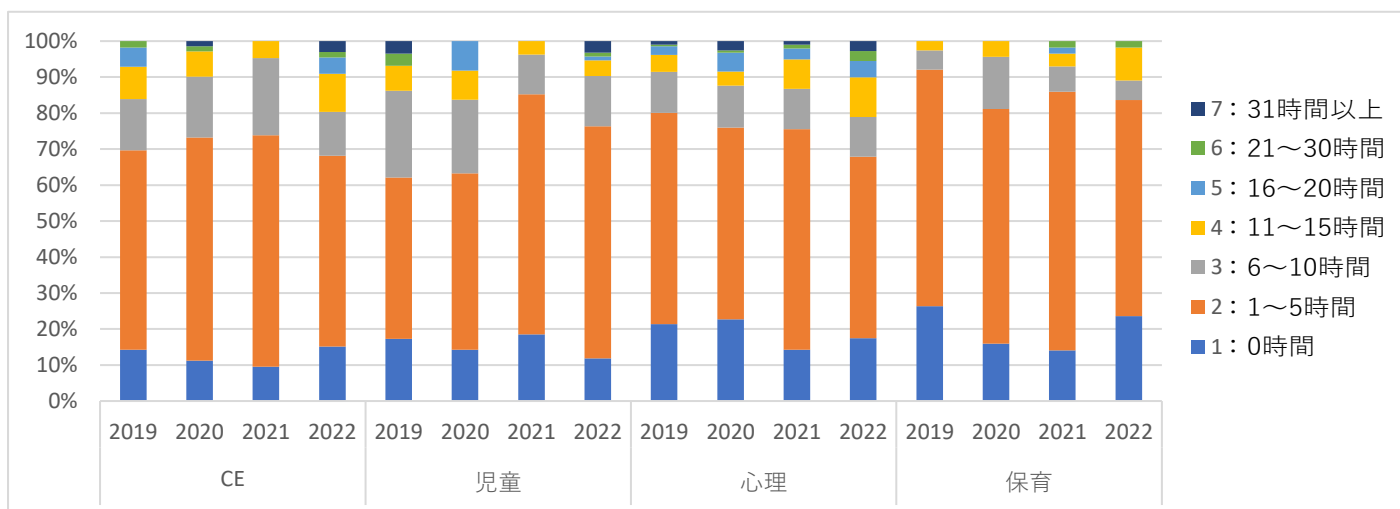
### ・授業（実験・実習を含む）への出席



### ・予習・復習・課題など授業に関する学習（事前・事後学習を含む）



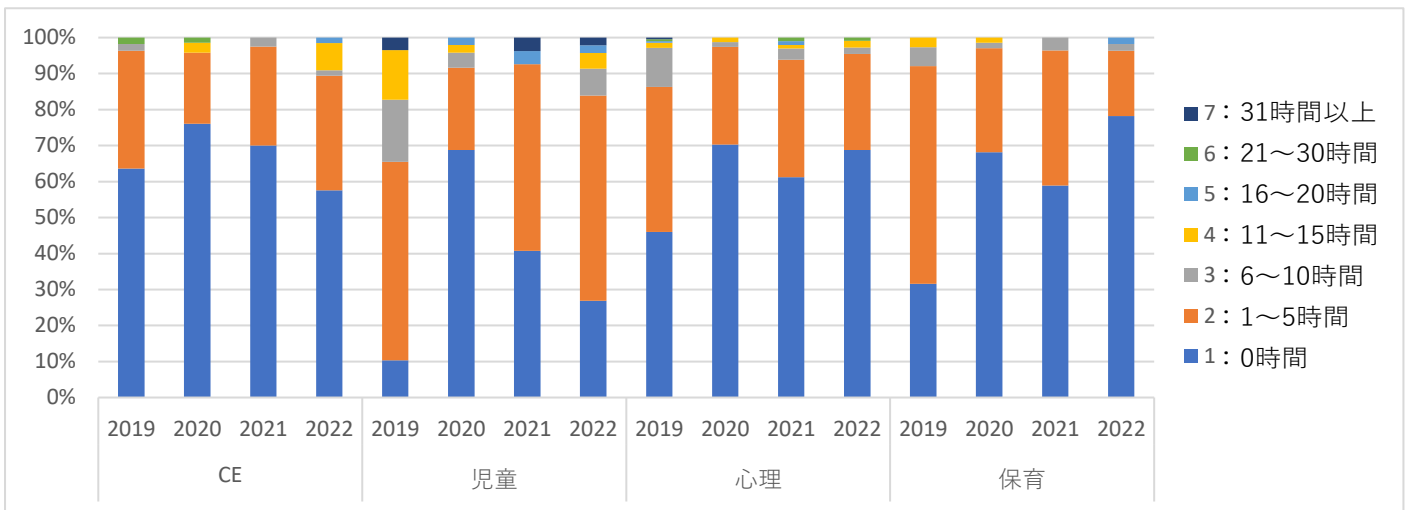
### ・授業の予習・復習・課題以外の学習



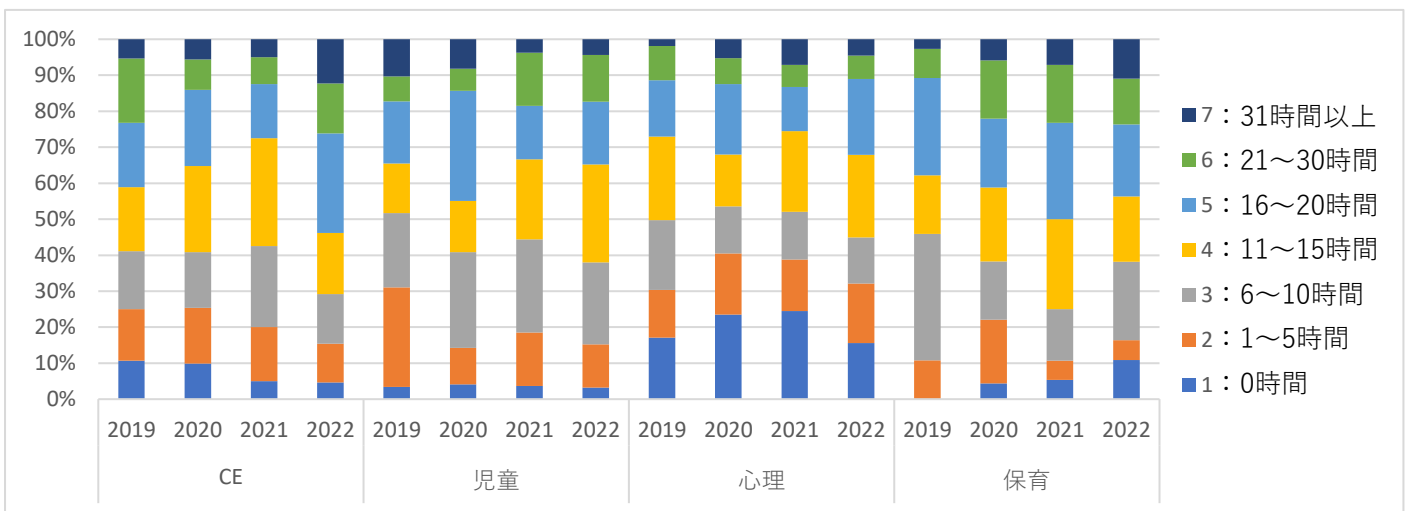
- ・心理やキャリアは4年生の授業時間が少ない
- ・どの学科専攻でも予習・復習等の学習時間は1週間で5時間以内が多い
- ・どの学科専攻でも課外学習の時間は1週間5時間以内が多い



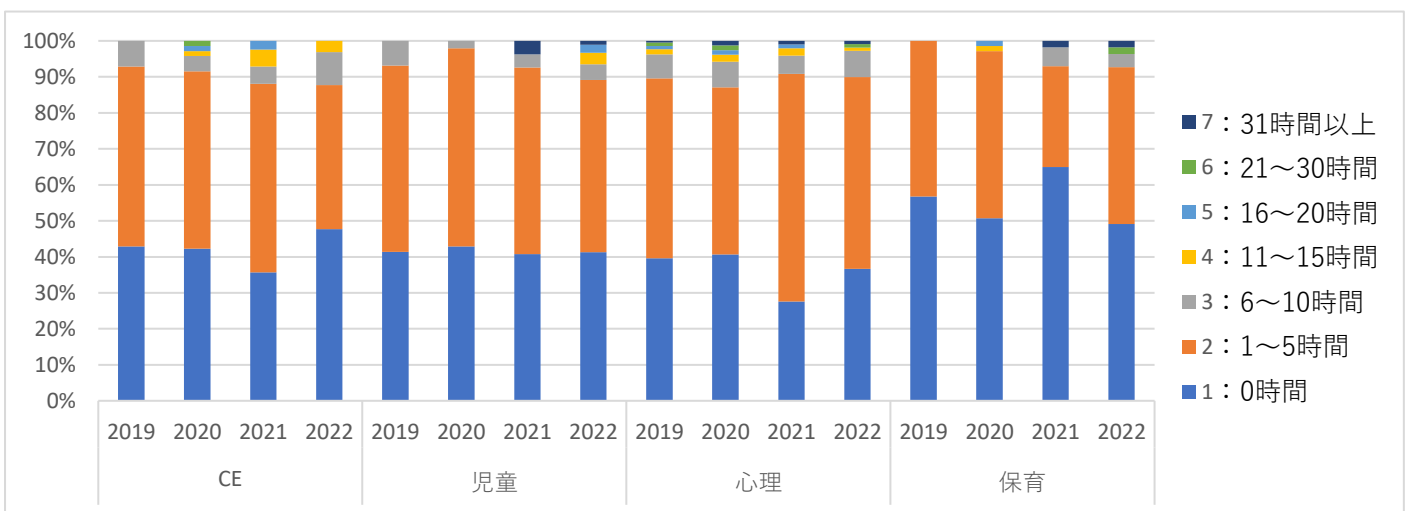
・部活動・サークル活動



・アルバイト・定職

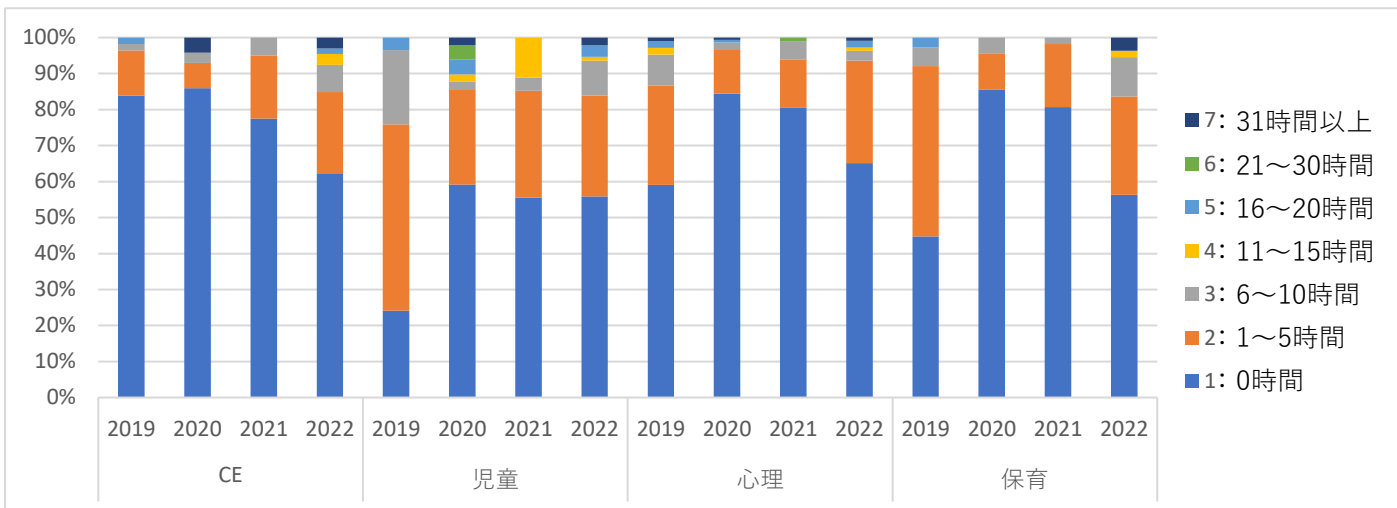


・読書(マンガや雑誌を除く)

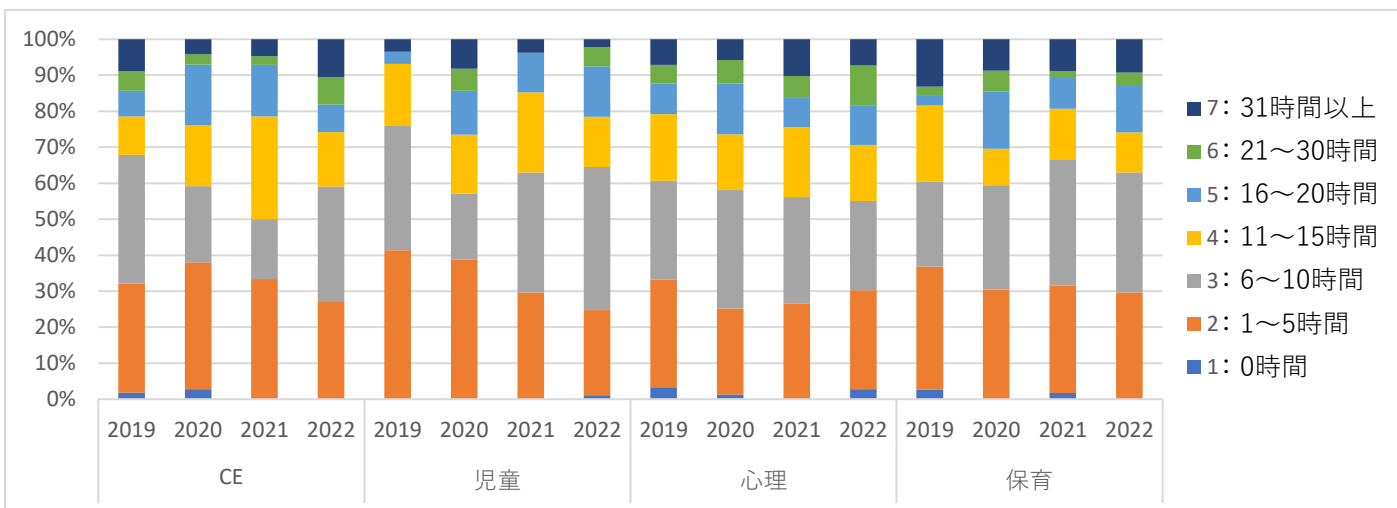


- ・コロナ禍前の 2019 年度でキャリアは部活・サークル活動の時間ゼロが多い
- ・どの学科専攻でも読書時間は 1 週間で 5 時間以内の学生が極めて多い

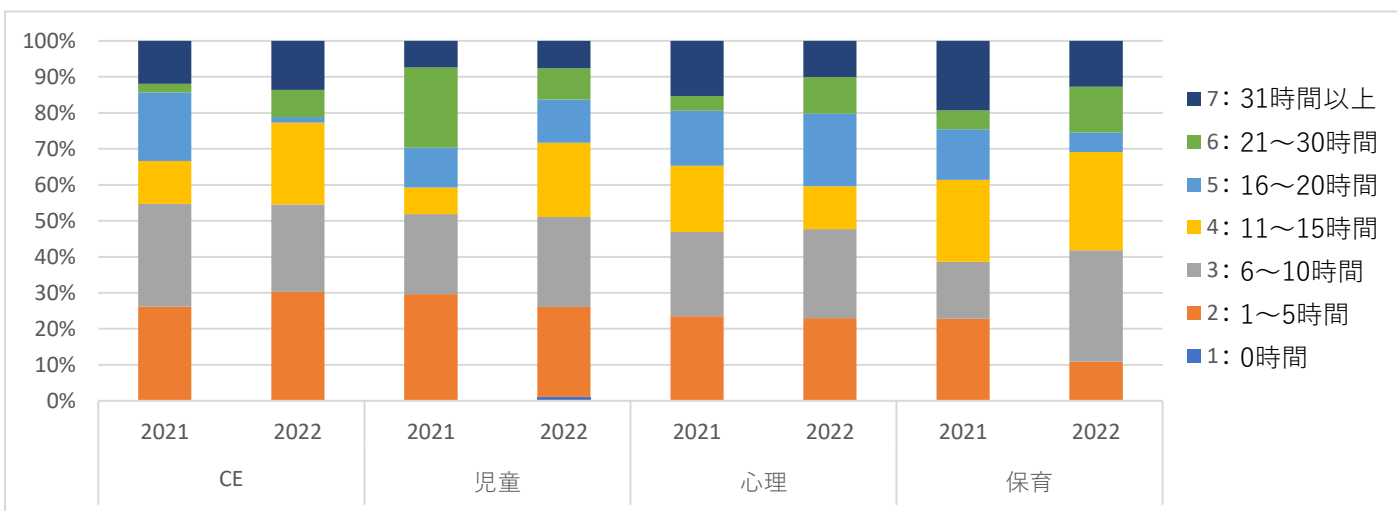
・ボランティア活動



・趣味・娯楽・交友

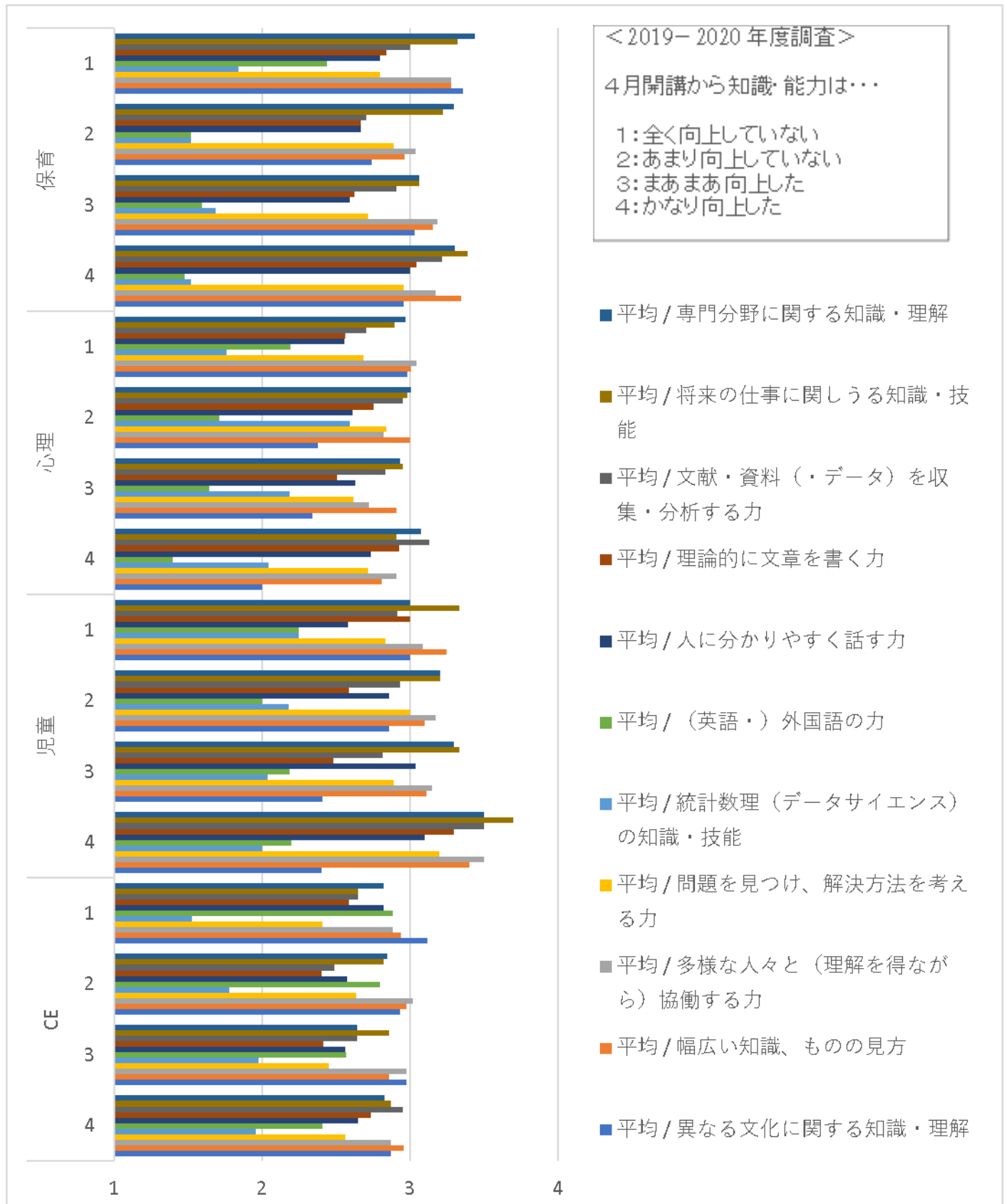


・スマートフォンの使用(学習のために使用している時間は除く)

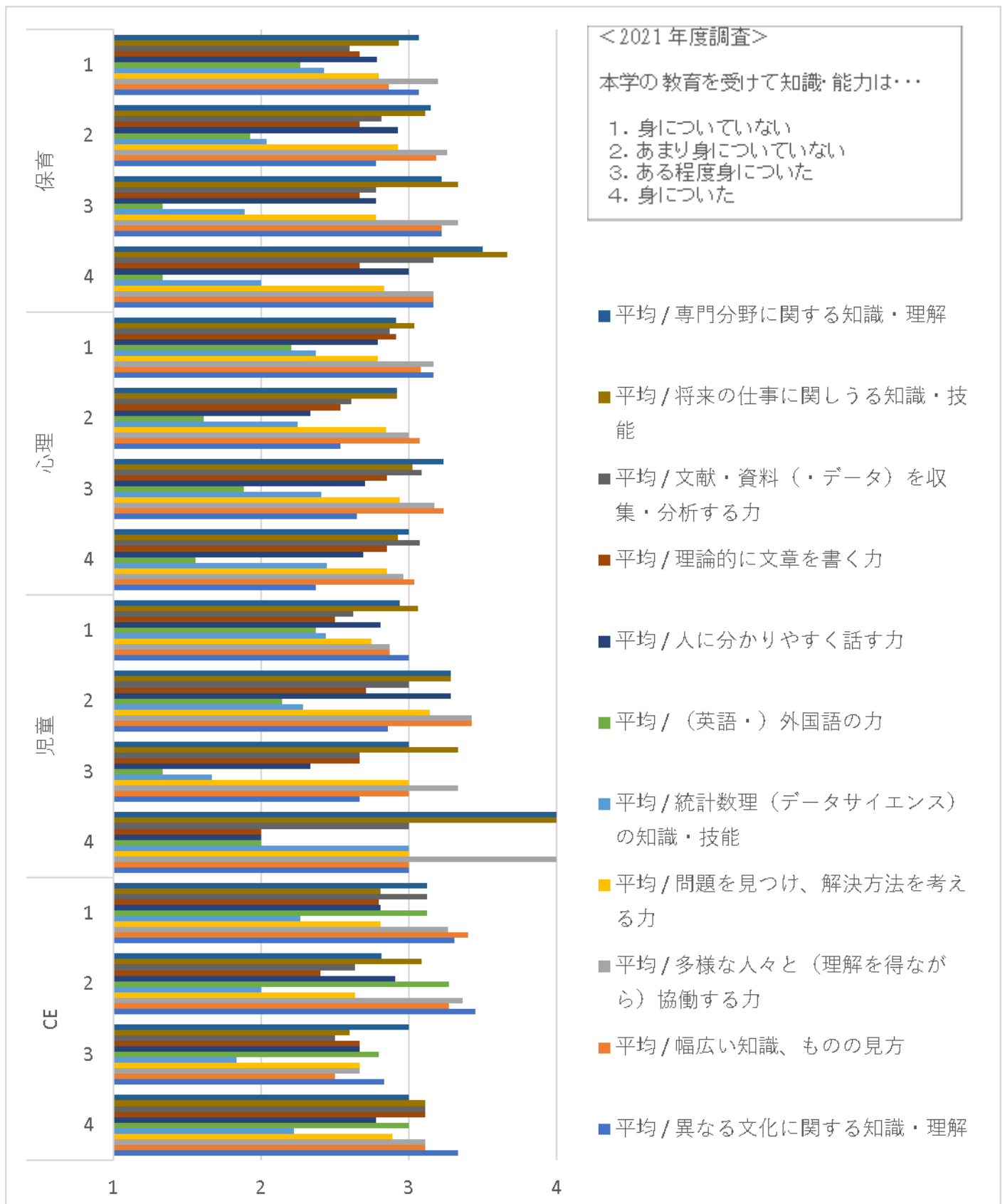


- ・コロナ禍の始まった2020年度よりボランティア活動の時間は減少した。
- ・趣味・娯楽・交友の時間はどの学科専攻でも10時間以内が多く、コロナ禍の2020-2021年度でも大きな変化はない

# 知識・能力の向上



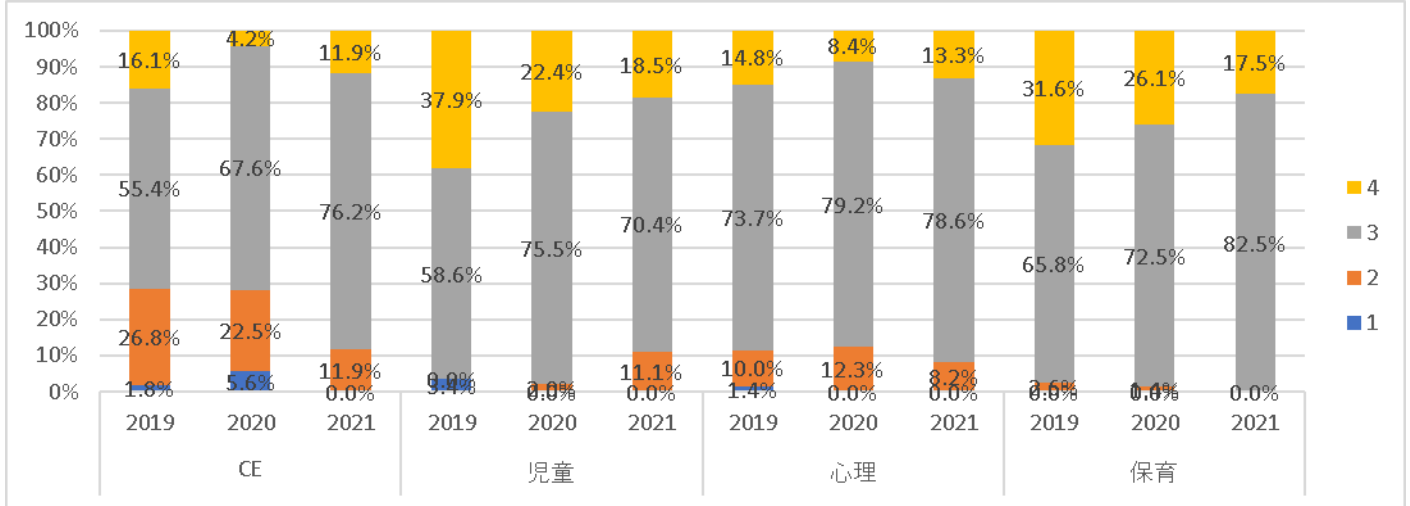
- ・「英語・外国語の力」と「統計数理の知識・技能」は向上度合いが全体的に低く、学科専攻や学年によって向上度合いに違いがある
- ・「分かりやすく話す力」や「問題を見つけ、解決方法を考える力」はどの学科専攻でも低い位置にある



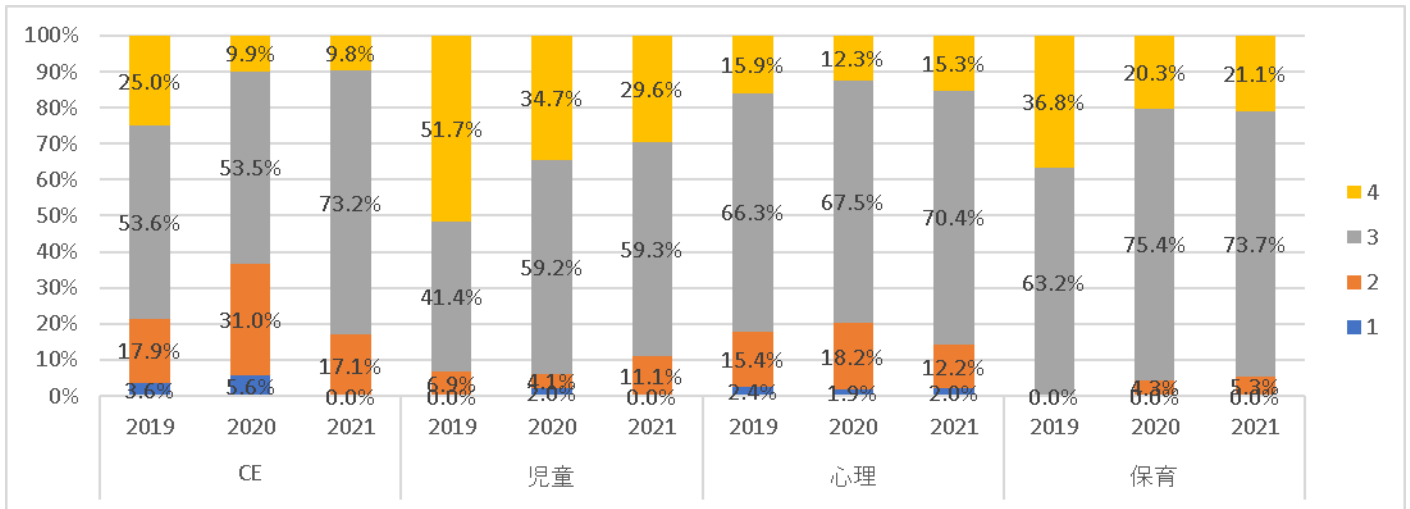
- ・「英語・外国語の力」と「統計数理の知識・技能」は身についていないと自己評価する学生が多く、その多さは学科専攻で大きく異なる
- ・保育と児童は4年生で、「専門分野に関する知識・理解」や「将来の仕事に関する知識・技能」が身についたと実感する学生が増える

4. かなり向上した(2019-2020)／身についた(2021)
3. まあまあ向上した(2019-2020)／ある程度身についた(2021)
2. あまり向上していない(2019-2020)／あまり身についていない(2021)
1. 全く向上していない(2019-2020)／身についていない(2021)

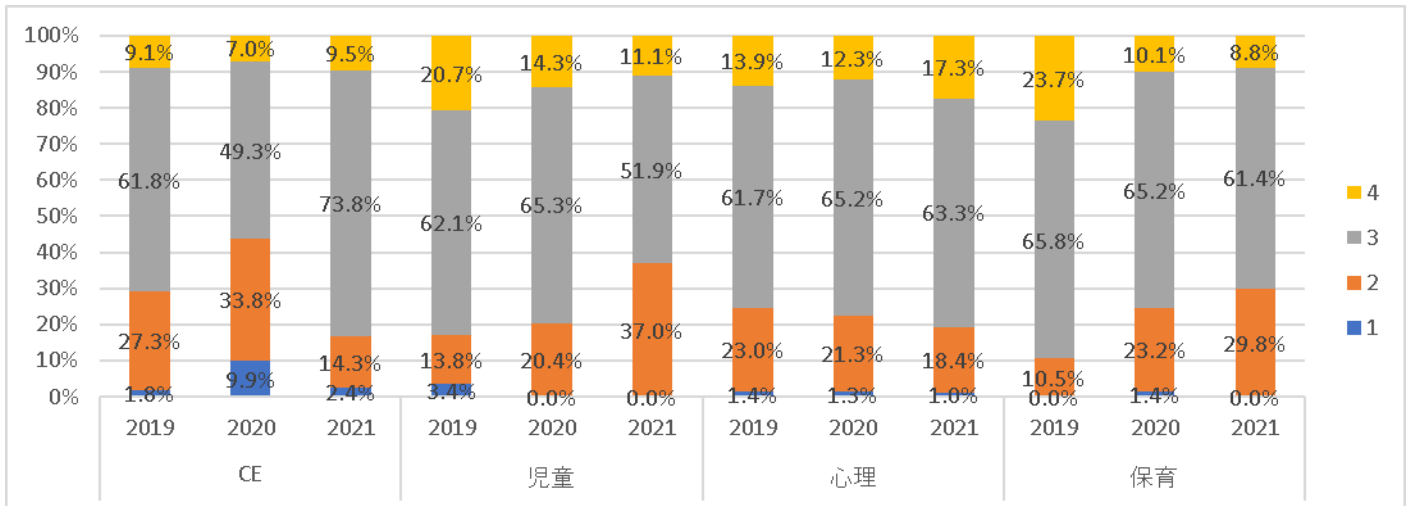
・専門分野に関する知識・理解



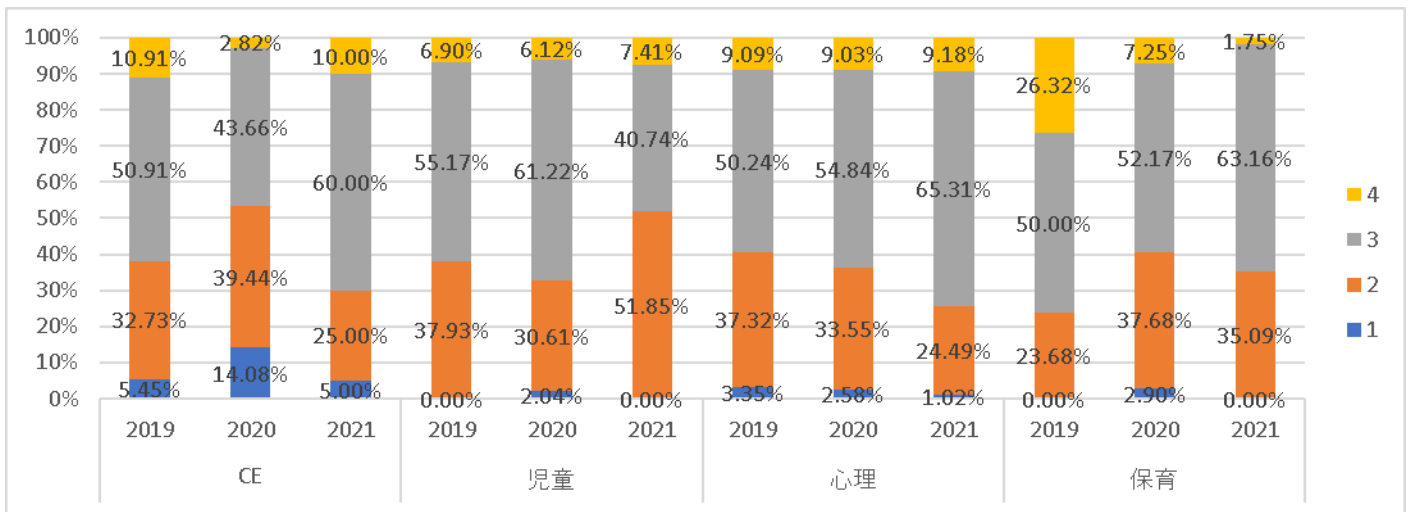
・将来の仕事に関する知識・技能



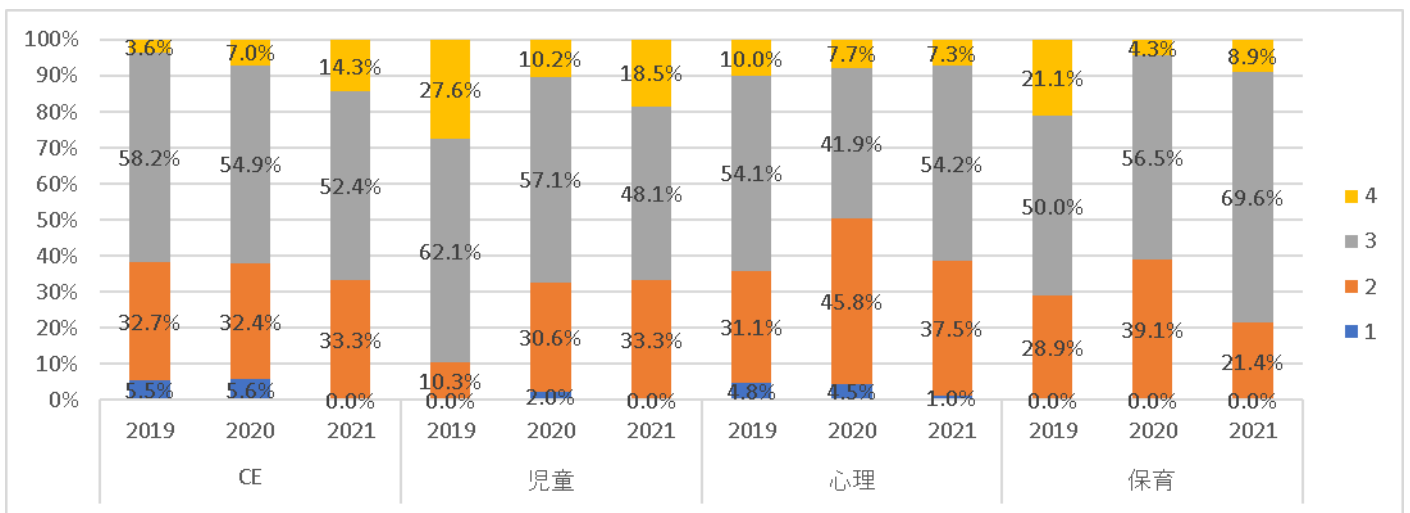
・文献・資料(・データ)を収集・分析する力



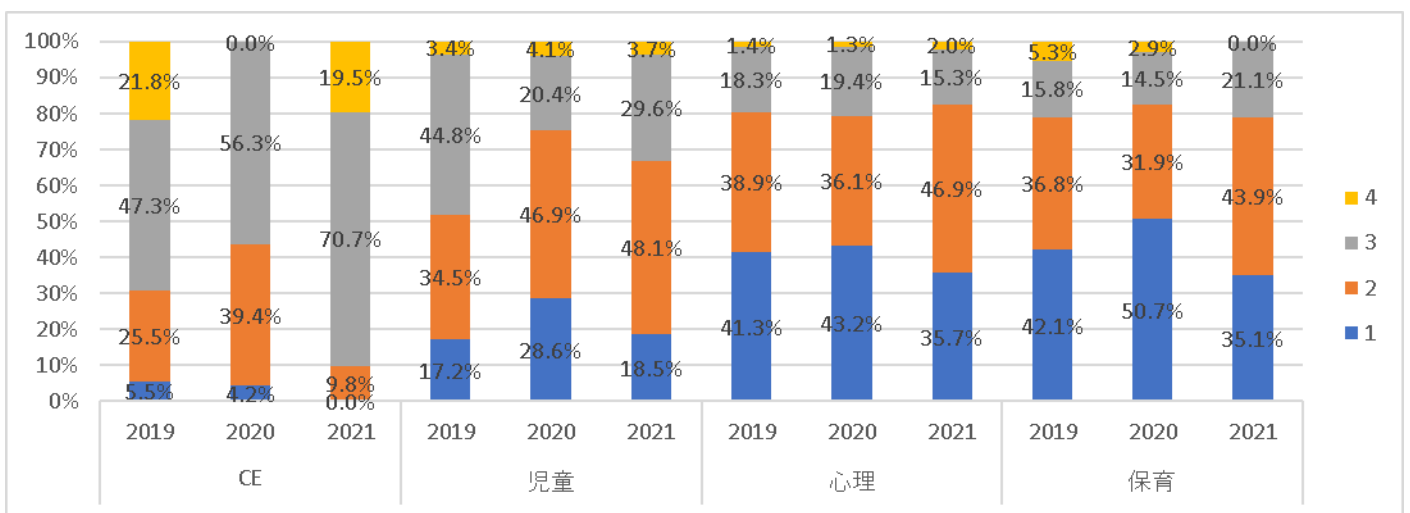
・論理的に文章を書く力



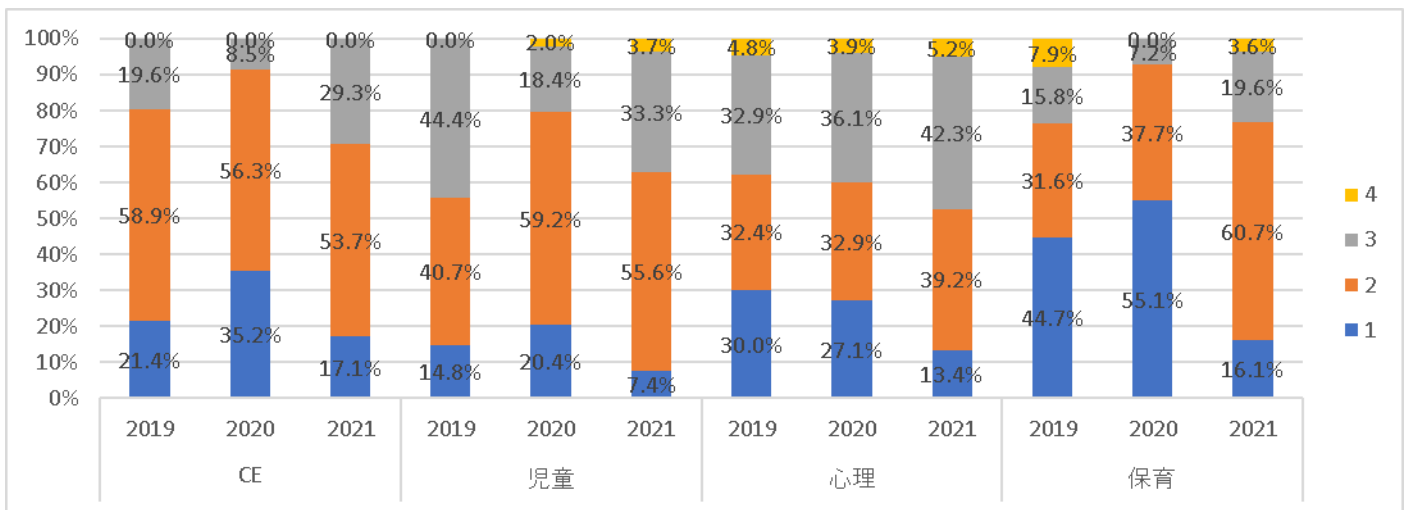
・人に分かりやすく話す力



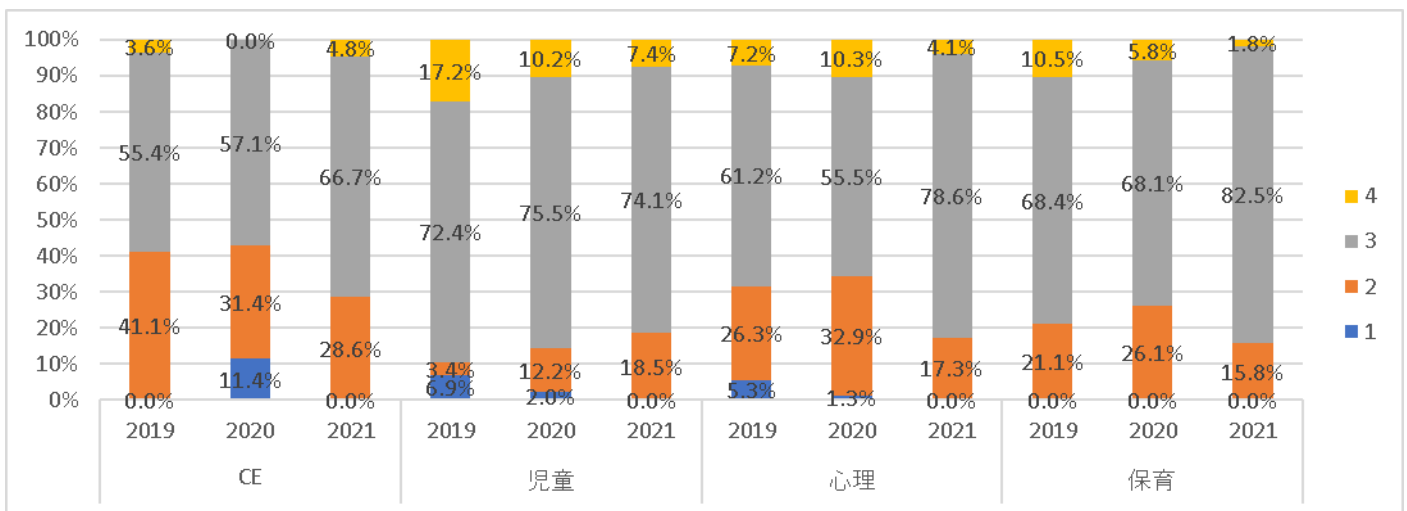
・(英語・)外国語の力



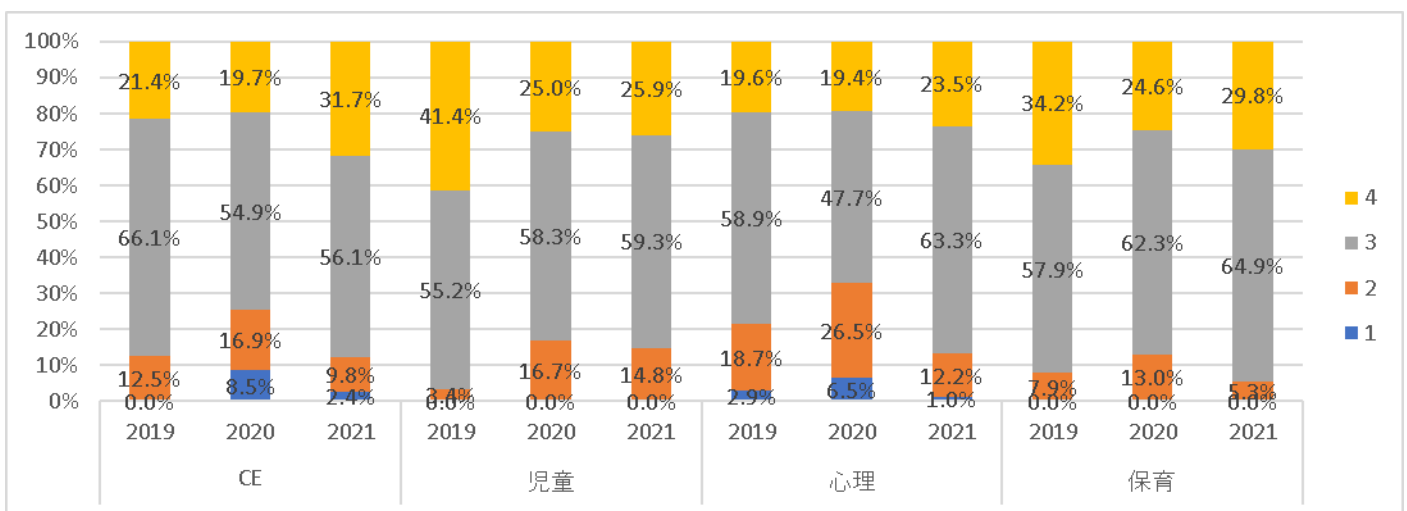
・統計数理(データサイエンス)の知識・技能



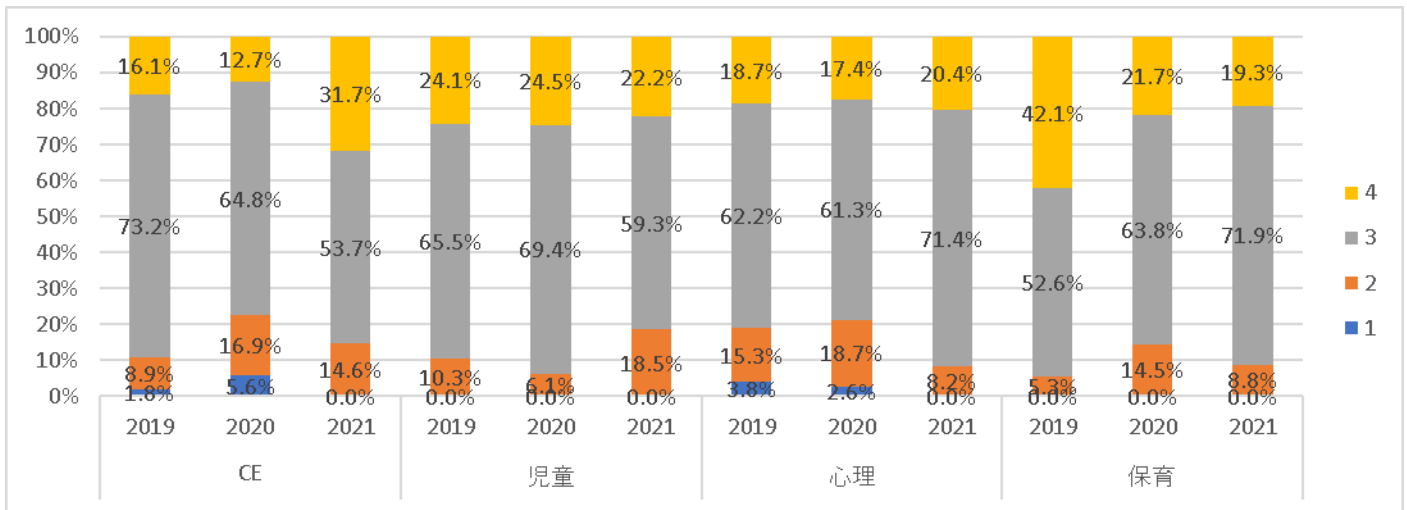
・問題を見つけ、解決方法を考える力



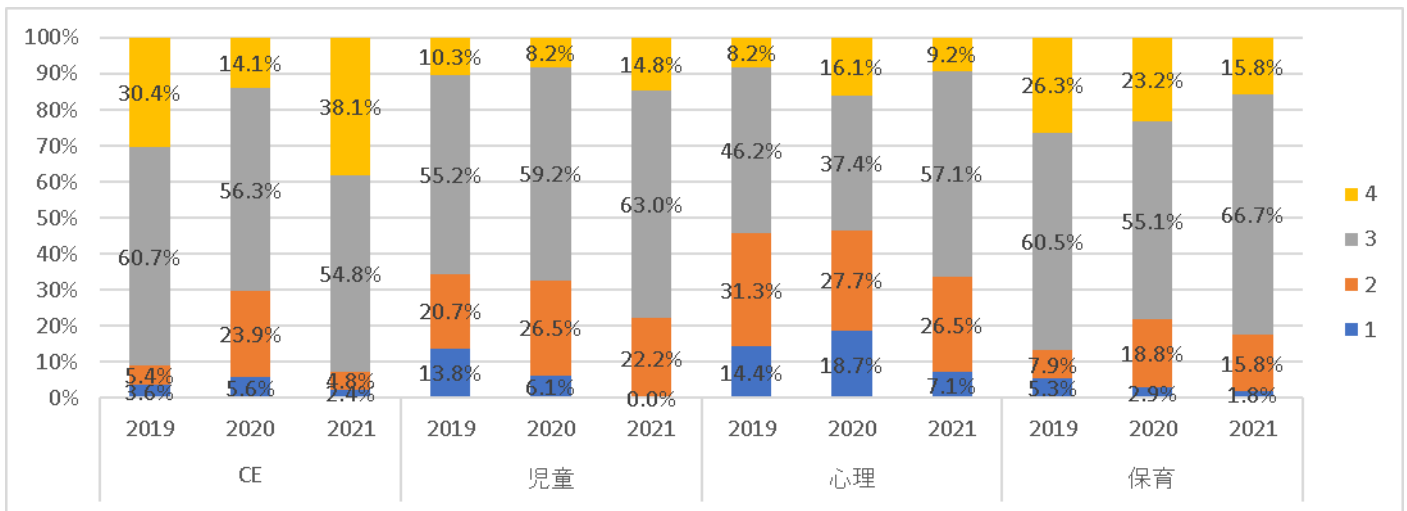
・多様な人々と(理解を得ながら)協働する力



・幅広い知識、ものの見方



・異なる文化に関する知識・理解





## 教育体制・教育課程の検討

2023年9月14日の学長室会では、上記の学修行動・学修実感に関するデータの集計・分析結果をもとに、大学全体または各学科専攻の教育体制・教育課程を振り返るとともに、問題点・改善点を検討するための議論が行われました。

まず、学修行動データに関しては、保育・幼児教育専攻では、「教員への親近感」「授業の面白さ」が学年進行とともに上昇することが特徴的でした。これについて、学年進行とともに全学修内容における専門科目の割合が高くなる状況から考えて、保育・幼児教育専攻の学生は保育の専門科目に対する意欲は高くなるのではないかという意見が出ました。ただし、専門科目に対する充足感が高まる一方で、共通教育科目に対する興味・関心は薄いことが懸念されます。また、このデータの解釈について、回答者の人数をみると1年次(特に保育・幼児教育専攻)はかなり少ないため、学修態度が上昇していると素直にみてよいかどうかという疑義も出ました。

また、学修実感データについては、キャリア・イングリッシュ専攻を除く学科専攻では「英語・外国語の力」が身につけていないと回答する学生が多くいることが確認されました。また、「統計数理の知識・技能」についても、身につけていないと回答する学生が各学科専攻で多くいることが確認されました。これらの知識・技能を養成する課程は各学科専攻の専門教育課程というより、どの学科専攻の学生も学べる共通教育課程に相当するとして、共通教育と専門教育のバランスや副専攻履修への議論が展開しました。「英語・外国語の力」を全学的向上については、「英語のルーテル」というキャッチフレーズを掲げて本学の教育イメージを拡げる一環として、インターナショナル小学部の教育の中で本学学生が英語による教育やサポートを実践する機会を作ることを検討しており、より英語に親しめる環境を構築していくことが重要だという意見が出ました。

共通教育と専門教育のバランスについては議論が賑わい、様々な意見が出ました。まず、共通教育を現代に合った学生を惹きつける科目に作り変えていく必要があります。従来からある科目内容や科目名を見直していくとともに、専任教員が共通教育科目を担当して専門教育科目を非常勤教員が担当する方向にシフトしていくことで、共通教育の強化・充実化とブランディングを進めていく必要があるという意見が出ました。また、共通教育と専門教育のバランスにはその課程で取得を目指す資格・免許が関わっており、共通教育の強化・充実化を図っても、ある学科専攻では、資格・免許に関わる専門教育課程で修得すべき科目の数がCAP制限に届くほど多く、共通教育科目を履修できない構造になっていることが指摘されました。これについては、各種の資質・能力の到達実感に関するデータの学年変化を見ながら、科目編成(開講年次を遅らせたり、閉講したりする)を行っていくことを確認しました。

最後に、IRデータについて付言しておきます。教学レポート No.3 は成績素点(教員評価)ベースのDP到達度の報告でしたが、本レポート(No.4)は学生のアンケート回答に基づいた学修行動・学修実感の報告でした。学生が提供するデータは客観性に乏しく参考にならないという話を時々聞きますが、多くの学生が回答することでその信頼性は高まり、教育効果を検証するに値するデータになります。2022年度4年生の学修行動・学修実感データは回収率が100%でしたが、これは、4年生が卒業論文提出の確認のために教務課に来た際に教務課課員がアンケート回答を直接促したことが要因です。多くの学生からアンケート等の回答を得るためには、このように実施体制を整えたり、回答を反映したフィードバックや改善を行ったりすることが不可欠であるように思われます。本学は全学的なアセスメントプランを整備して4年目になりますが、アセスメント実施体制を再検討す

るとともに、各種アセスメントデータをどのように大学改善に活かすかを明確に示したより実質的なアセスメントプランに転換していく必要があると思われます。

発行

〒860-8520 熊本市中央区黒髪3-12-16

九州ルーテル学院大学

IR・情報委員会／総務課 IR 情報室

2023年9月15日発行